どんな問題を提起したか
じん肺問題学習会

七月二十八日、三川指導部に組合員有志が集まり、現在重大な問題となっている〝けい肺〟に関する学習会を開いた。

特にけい肺患者で、加わる病気に苦しみながら生きている人を囲んで交流を行ったが、その結果けい肺問題の深刻さがまざまざとつきつけられ、集まった人びとは改めて問題の深刻さに心も寒くなる思いだった。

別項は、その日の問題提起と交流の抜粋である。けい肺防止・命を守るたたかいの資となればさいわいである。

退職後に発生

――けい肺の潜伏期間は十年から十五年あり、いま塵埃を吸ったからすぐ病気が起きるということではない。ほとんどの例が、退職した後発病している。

退職後異常が出て、他県から大牟田に帰ってくる。よそではわからない。

――けい肺の完全な予防は、坑内ではできない。

石炭の粉塵を吸いつづけても三年から五年までぐらいは回復の見込みもあるというが、それ以上たつと炭肺になる。一度この病気にかかると、絶対に治らない。散水を多くし、防塵マスクは絶対に着けてほしい。

なまけ者とは

――けい肺法ができたのが昭和三十年。三十五年にじん肺法に変った。

二十五年頃まではひどかった。掘進をやった人はいうが、職場は霧がかけたようで一寸先がわからなかった。

タオルを鼻に当てて作業。苦しくなると、タオルをはずしてしまう。その頃掘進をやっていた先山やすけ先はもう世にいない。

――けい肺の問題は終戦後、医学的、行政的、組織的にとりあげられるにいたった。

昭和二十二年に労働省が設置され、労働基準法が制定されると、ようやく働く者の生命と健康が問題になり、同時にけい肺の問題も新しい角度から検討されるに至った。

それまではけい肺患者を出しても、「けい肺ではない。あれはなまけ者で、よろけだ」、として片づけられていた。

労働組合の出発と同時にけい肺委員会が設置され、三井天領病院に当時の一医師さえ「掘進は三年くらいしたら、あと三年くらいは軽い作業につかんとけい肺患者をへらすことにはならぬ」、といっていたほどである。

第一の治療法は予防
三井さんの――
息のかかった病院はダメ

患者を抹殺か

問　い　今後の問題としては。

答　え　給与面のこともひっくるめて法の問題にしないとただ予防せよ、だけではどうにもならない。

それから管理四（最重症度）にならぬと、治療費も補償もまったくない、というのが問題だ。医師のなかには、治療補償など管理二からやるべきだ、という人もいる。

ところから、真っ黒なものが出てきたのだそうで、「採炭をやっていた」と聞いて納得されたという。

必ず起る病気

問　い　けい肺の自覚症状について。

答　え　坂道をのぼるときなど胸が苦しい。圧迫される。せき、たんが出る。肩から腰にかけてこる。呼吸困難になる。

神経が昂進する。カゼをひきやすい。倦怠感がある。のどがかわく。

問　い　大牟田と荒尾ではどこで調べてもらったらよいか。

答　え　三井さんの息のかかったところではだめ。なかなか、認定がおりない。

それがなかなか徹底しない。軽作業となるとすぐ賃金が下がってくるので、本人が勤告に応じない実態。その恐ろしさがわからぬ。管理一（軽症度）の人達に、「あんたも将来けい肺になるじゃろう」というと、「いや、おればならぬ」というのがきまった返事だった。

久留米大学関係で診てもらうと、問題が少い。

いまの医者は、大半が保守的。政府はなるべく患者を減らそうとするし、労働基準局と医師がつながっている。要するに金もうけ主義の医師ばだめ。そんなことで泣かされた患者がいる。

三年前に四山鉱に勤めていた人が、久留米大学病院に胃病で入院中開腹した折り、「いったいこの人の病気は何だったのか」、と医師が頭をかしげていた。肺、胃、そのほかあらゆるところから、真っ黒なものが出てきたのだそうで、「採炭をやっていた」と聞いて納得されたという。

患者を抹殺か

問　い　今後の問題としては。

答　え　給与面のこともひっくるめて法の問題にしないとただ予防せよ、だけではどうにもならない。

それから管理四（最重症度）にならぬと、治療費も補償もまったくない、というのが問題だ。医師のなかには、治療補償など管理二からやるべきだ、という人もいる。

町病院の当時の一医師さえ「掘進は三年くらいしたら、あと三年くらいは軽い作業につかんとけい肺患者をへらすことにはならぬ」、といっていたほどである。

必ず起る病気

問　い　けい肺の自覚症状について。

答　え　坂道をのぼるときなど胸が苦しい。圧迫される。せき、たんが出る。肩から腰にかけてこる。呼吸困難になる。

神経が昂進する。カゼをひきやすい。倦怠感がある。のどがかわく。

問　い　大牟田と荒尾ではどこで調べてもらったらよいか。

答　え　三井さんの息のかかったところではだめ。なかなか、認定がおりない。

久留米大学関係で診てもらうと、問題が少い。

いまの医者は、大半が保守的。政府はなるべく患者を減らそうとするし、労働基準局と医師がつながっている。要するに金もうけ主義の医師ばだめ。そんなことで泣かされた患者がいる。

三年前に四山鉱に勤めていた人が、久留米大学病院に胃病で入院中開腹した折り、「いったいこの人の病気は何だったのか」、と医師が頭をかしげていた。肺、胃、そのほかあらゆる

問　い　治療法はないということだったが。

答　え　進行を防げることは不可能でも、いくらかでもそれを遅らすことはできる。

しかし最良の治療は予防だ。発じん防止と防じんマスク。さらに重大な環境改善の問題がある。

問　い　労災法改正上の問題点について。

答　え　けい肺の問題については、新労組員のほとんどの人が知らないと思う。

いや、労働関係でも、十分知っているといえない面がある。こんどの労災法改正で私たちがわからないのは、なぜ長期給付を廃止して障害補償にするか、ということだ。そこでは、会社の責任はなくなる。どうしてもわからない。

このまま許せば、労災法によって、このままではもうよくはならぬ、「治癒だ」ということで抹殺されてゆきかねない。

×

あとは省略した。

鉱長よホコリの中にたたずんで見よ

宮浦鉱西一卸払で、フライアッシュ圧送充填開始。たちまち一卸は、フライアッシュのほこりが充満する。

たちこめたホコリで視界はなくなり、足元も見えなくなる。

ベルト当番の機械工は、このホコリの中から逃げ出すこともならず、じっとうずくまる。

鼻先が、ベルトにこするぐらいにしなければ、ベルトの流れの状況もわからぬほどだ。

会社は従来のフライアッシュ充填方式にくらべ、パイプラインはいらず設備も簡単だから、大幅に経費が節減でき、労働力も少くてすみ、特殊ノズルだからホコリも出ないと鼻高だか。

鉱長よ、副長よ、係長よ、十分間でもよいから、フライアッシュ圧送充填中の四五・八片排気坑道にきて、ホコリの中にたたずんで見よ。

とにかくホコリをなくすために、フライアッシュ圧送充填方式はただちに中止せよ。そしてじんあい対策を、早急に確立せよ。

×

宮浦指導部電気分会新聞〝交流〟から。なおマンガも同紙から紹介しました。

カンパ御礼

先に突然の火事のために全焼罹災されました受川孝さん（お母さんのお名前はミョさん。現在「熊本市本庄一丁目、熊大附属病院第一内科」に入院中）のために、皆さんに救援カンパをお願いいたしましたところ、十万四千四百円のお金が集まりました。さっそく入院先におとどけして、おおくりすることといたします。

どうも、ありがとうございました。

なお、受川孝さんの方から「これは組合結成三十周年のお祝いに……」として、十万円もの闘争資金カンパをいただいております。その旨記して、お礼申しあげます。ありがとうございました。

三池炭鉱労仂組合

今度は三川鉱で重大災害
炭函で片足を切断
合理化の現状まざまざ

坑内労働者がかろうじて命だけは保つことができたものの、しかし片足を切断するという重大災害が、三川鉱（加藤紳二鉱長）で起きた。

×

八月四日午前九時五十分頃、三川鉱五十御西材料運搬坑道（坑口から九千八十メートルのところ）で、仕繰工の白木川清さん（35歳荒尾市原万田社宅居住）が、鉱車（バッテリー・ロコ）により左足挫滅創で切断。肋骨左右各五本骨折、後頭部および右肩裂傷――などの重傷を負った。

三井天領病院に担がこまれ加療命だけは何とかとりとめたものの生れもつかぬカタワとなり、やがて訪れる停年後のきびしい世のなかを生きてゆくことを、余儀なくされる身となった。

白木川さんは、自分が運転するバッテリー電車（アーチ枠材料五函、バラス一函、半胴割三函積みの、計九函連結していた）がスリップするので、それを防止するためにレールのうえに砂をまく作業をやっているうちに足をすべらし、ころんだ。そのため空函線にとめてあったバッテリイー・ロコとの間に体をはさまれたうえ、キリモミになった模様だという。

作業は常識では考えられないことだというが、これはほかでもなく、労働者をそこまで追いこんでいる合理化の現状をまざまざと告発する出来ごとである。事実指摘される問題点はおびただしい。

昨年七月以降、全国的に多発した重大災害から、鉱山保安監督局は、八月をとくに〝重大災害防止月間〟に指定、石炭各社に通達を行った。それにもとずいてその第一週が始まったばかりでの災害だった。

しかも先の鶴戸さんの命をのみこんだ感電死災害からまだ一カ月もたっていず、このように頻発する事故は何ばさておき、三池炭鉱の保安状況の悪化を物語っている。

三池労組はさっそくビラを配布して警告を行ったが、ビラはその一節で次のように訴えている。

「重大災害防止月間を、飾り文句や形式的な言葉で終らせるのでなく、職場不安全要素、不安全作業、危険作業を絶滅するための第一歩にしようではありませんか」

このうえ、重大災害の頻発を許してはならぬ。

職場に声あり

近頃、各方とも上りめし（坑外にあがってからめしを食べること）が多いとの話。

石炭見直し、といわれる時代に、とかいっても石炭は出さんならず、五日労働制は無理じゃろうが、最底でも時間内に食事くらいはさせんとやろか。

×

ZD責任完遂上りめし

とぼけとる見直しじゃにゃあ、悪なおし

見直しならめしは定時にしてはいよ

週休二日こっちは残業で上りめし

×

期末手当闘争でも……

話し合いでくれる会社じゃなかつぼん

×

三川指導部五分会新聞〝やまなりから〟。